

## 別れの歌 : 文苑

著者	錦浦, 愁人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 6
ページ	7 1 - 7 2
発行年	1906
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5966">http://hdl.handle.net/2298/5966</a>

露ふりこぼし花ふみて

いしぶみひくき無縁塚

晝あそびけん里の子の

蓮花草ゆんかの束に尾をふれて

櫛の葉にたく士團子つらたんご

足あしにくづすはかたかるに

ころがしやれば寂寥しやくりやうの

そよぎは草にみちぬかな

## 別れの歌

錦浦愁人

野をゆく水にたどへけん

時とは遂に幼子の

老ひゆく先を呪ふべき

かたちみにくき神の名か

あふ二十年の夢ゆれて

今は別れとなりにつけり

見よ安濃川の春風に

柳のみだれつらくとも

流れに淀む小櫻の

花の姿をかへすべき

よすがもあらで今更いまさらに

破れし小笠の夢ぞうき

かへすうつこの思ひ出も

藤さくむろにまごひして

衣桁いせうにかけし旅衣の

小袖こそでを侘わびぶる我れなれば

遠の山とほのやまべにさすらひて

かさねん夢はつらけれぞ

小琴こごに凭たよらんせめてたゞ

別れせばしき花かげに

炷たきすとも憂態うれたての

人の涙は乾かじを

十三絃はしら糸の

しらべみだれし『浮舟』や

さば今更にその歌の

悲しき文字に泣かんやは

『沈黙』が示す光明を

永久の生命のなじみにて

連翹にふる春雨を

人の涙とよばん哉

涓流遠く野を遊いて

望郷低唱

みどり野にまる寝の晝の夢乗せて母ます郷に吹けよ春風

花

柴

岸邊の花はたそがれぬ

はろくかすむ紀の山の

雲より落つる瀧津瀬に

もゆる心を冷すとも

夢のたぐちの胸の内

立ち別れなばあゝ人よ

四つの袂に重ぬべき

夢はこれよりしげくして

不壞の笑まひはなかるべし

海にのぞめる欄干に

別れの曲をいざ奏でなん